

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

ドイツ・ポップス研究：
「流行歌(はやりうた)」から見えてくるもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/865

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ドイツ・ポップス研究

——^{はやりうた}流行歌から見えてくるもの——

若山俊介

0. はじめに

ドイツというと「クラシック音楽の国」というイメージでくられてしまいがちであり、またそれはそれで間違いともいえないのだが、そうしたドイツにもいわゆるポップスやロックのようなジャンルがあることはいうまでもない。また、その中で聞かれているのは、歌であれば英語の歌詞をもったものが圧倒的に人気が高い。インターネットなどの先端技術がこれだけ普及した今では、自分の興味に従って世界各国どここの音楽でも瞬時に入手できる。そして、世界のポップスをリードしているのは相変わらずイギリスやアメリカだから、こうした傾向にはますます拍車がかかることだろう。しかし、ドイツにおいてはドイツ語の歌詞をもつ歌で人気の高いものも当然存在する。本論では、そうしたドイツ語の歌に焦点を当て、その歌詞からいったいどんなものが見えてくるのかを探ってみたい。

すでに昨年度、「うた」から探る国民性」というテーマで、日本とドイツにおいて数回に渡りアンケート調査を行った。¹これは主としてポップスについて、日本人とドイツ人がどのようなイメージを抱いているかの意識調査であり、最終的には両者を比較し、その共通点や相違点を洗い出し、そこから相互の国民性を浮き彫りにすることを目的としている。しかし、現在はまだその最終段階には至っておらず、本論ではまずドイツの方だけを取り上げ、それを分析することにしたい。

アンケートの質問項目は5つであり、内容は以下のとおりである。

- 1) Welches ist Ihr aktuelles, deutschsprachiges Lieblingslied?
(ドイツ語の歌の中で、現在あなたが最も好きなものは何ですか?)
- 2) Wer ist Ihr/e deutsche/r Lieblingssänger/in bzw. welches ist Ihre deutsche Lieblingsgruppe?
(あなたの最も好きなドイツ人の歌手またはグループは誰ですか?)
- 3) Welches deutschsprachige Lied wird Ihrer Meinung nach am häufigsten gesungen?
(最も愛唱されているドイツ語の歌は何だと思いますか?)

1 日本学術振興会 平成19年度科学研究費補助金による関連調査(ドイツ語のアンケート表題:〈Eine Umfrage über das Verhältnis der populären Musik zu gesellschaftlichen Verhältnissen〉)

4) Welches deutschsprachige Lied hat Ihnen Trost oder Mut gespendet usw?

(あなたに慰めや勇気を与えてくれるドイツ語の歌は何ですか?)

5) Welches ist Ihr persönlich wichtigstes Lied?

(あなたにとって最も大切な歌は何ですか?)

本来はドイツのポップスに絞りたいであったが、質問項目では単に「歌」とだけした。これは回答者に出来るだけ制約感を持たせず、自由に答えてもらいたいという配慮からである。初めからドイツ・ポップスに制限することで、アンケートの意図を詮索しながら回答するような状況は避けたいであった。その際、ただ「歌」としても、おそらくはポップスが主流を占めるだろうという予測もあった。また、内容的に見て、一部重複するような質問もあり、例えば1)と5)などは相関関係があるといえる。つまり、「現在最も好きな歌」であるがゆえに「最も大切」ということになるし、また逆に「最も大切」だと思っているがゆえに「現在最も好き」であるということにもなる。さらに2)については1)や5)で答えた歌を歌っている歌手やグループになりやすいということもあらかじめ予想できたことではある。しかし、1)で「現在はこの歌が最も好き」だが、5)でそれでも「自分にとっての大切な歌」は別にあるということもありうるだろう。また、1)や5)の歌を歌っている歌手・グループとは別に、好きなものがあるかもしれないというのが当初の考えであった。それぞれの人が質問の内容をどう受けとめるかにより、回答も微妙に異なってくる可能性があり、結局アンケートの回答者次第ということで柔軟に対応しようということにした。

さて、ドイツでのアンケートの回収数は78だった。これは当初の計画を大きく下回ることになった。そもそもは男女の性別や10代から10年刻みで区切り60代以上までの世代を配慮し、それぞれバランスよく回収することを考えていた。しかし、調査を準備する過程で「そんなにうまく具合にいくはずがない」と考えるようになった。つまり、街頭で依頼するにしても、知人を頼って回答を募ったとしても、性別や世代にこだわっているような余裕はない、回答がもらえるのなら、いわば手当たり次第にお願いしていくほかはないだろうというのが結論だった。実際に実施してみて、まさに予想通りだったというのが正直なところである。とはいうものの、このアンケート調査の狙いは一般のアンケートとは異なり、全般の傾向や大勢を数値によって把握することではなかった。それらをグラフ化したり、表にまとめたりするのではなく、回答にどのような曲目、歌手・グループ名が挙げられるのか、それを知ることが主要な目的なのである。そのような意味では、回収数は少なくみえるかもしれないが、分析のための資料としては十分なものである。次章からは、これらのアンケートの回答をもとに、ドイツにおいて注目されている「歌」や「歌手」を紹介しつつ、ドイツ・ポップスの特徴を明らかにしていきたい。

I. 往年の大ヒット曲と普遍性

まず、アンケートの順序と異なるが、質問項目の3)「最も愛唱されているドイツ語の歌は何だと思うか」についての回答から見ていきたい。ここではポップスではなく、「ドイツ国歌」や「きよしこの夜（聖夜）」、「モミの木」などのドイツ民謡、また私たち日本人にはそれほどなじみがあるわけではないがドイツでは誰もが知る童謡などが多かった。

「ドイツ国歌」についてはすでに有名な話であるが、一応確認しておきたいのは、現在は1番、2番は歌われず、3番が主に歌われている。これは1番の歌詞の中に「世界に冠たるドイツ（すべてを凌駕するドイツ）」という文句があり、これがヒトラーの時代にさかんに歌われたことで世界征服の概念と結びつく。そして、2番には女性蔑視とも解釈できるような歌詞があり、いずれも悪いイメージを呼び起こすということで3番だけが残ったということである。

また「きよしこの夜」にも有名なエピソードがあり、これはドイツではなくオーストリアのザルツブルク近郊の村で、1818年のクリスマスの時にオルガンが壊れていたことから、この歌がほとんど即興で作られ、ギター伴奏で歌われたというものである。歌詞はヨゼフ・モール（Joseph Mohr）という教会の補助司祭によるものであるが、これはその2年前の1816年に作られていたということである。即興で作られたのは曲の方で、これは村の学校の先生のかたわら教会のオルガニストもやっていたフランツ・グルーバー（Franz Gruber）によってミサの始まる数時間前に完成したのだという。ちなみにギターを伴奏したのはモールとのこと。²

さて、回答として国歌や民謡、童謡が多いだろうというのはある意味予想通りのことで、それほどか場合によると、この種のものに集中する可能性もあると考えていた。しかし、そういうものばかりでなく、新旧のドイツ語のポップスの名がかなり多く挙げられていたのはむしろ意外であった。そうしたポップスで複数名が回答している歌のタイトルを紹介する。（ドイツ語のアルファベット順；カッコ内は歌手・グループ名）

- 1) 99 Luftballons (Nena) / 99の風船〔邦題：ロックバルーンは99〕(ネーナ)
- 2) Alt wie ein Baum (Puhdys) / 一本の樹のように老いて (プーディース)
- 3) Dieser Weg (Xavier Naidoo) / この道 (クセイヴィア・ナイドゥー)
- 4) Ein bisschen Frieden (Nicole) / 少しだけ平和を (ニコル)
- 5) Ein Stern der deinen Namen trägt (DJ Ötzi / Nik P.)
/ 君の名をもつ星 (DJ・エッツィ / ニク・ペー)
- 6) Griechischer Wein (Udo Jürgens) / ギリシャのワイン (ウド・ユルゲンス)

2 「きよしこの夜」については以下を参照した。
http://de.wikipedia.org/wiki/Stille_Nacht,_heilige_Nacht

- 7) Jugendliebe (Ute Freudenberg) / 若かりし頃の恋 (ウーテ・フロイデンベルク)
 8) Marmor, Stein und Eisen bricht (Drafi Deutscher)
 / 大理石、石、鉄を砕く (ドゥラフィ・ドイッチャー)
 9) Über den Wolken (Reinhard Mey) / 雲の上で (ラインハルト・マイ)
 10) Wahnsinn (Wolfgang Petry) / 狂気の沙汰 (ヴォルフガング・ペトリ)

たまたまちょうど10曲だが、この中で現在ブームの渦中にあり、バリバリの人気をもつ歌手によるものは3)と5)のみであり、これについては後で取り上げることにする。ここでは、それ以外のものについてそれぞれ簡単に説明することにする。

まず1)であるが、これは1980年代初頭、めずらしく日本でもヒットしたネーナが歌う曲である。今でも時々テレビコマーシャルに使われたりしているが、ネーナとこの曲については別のところ³で取り上げたことがあるので、ここではこれ以上の言及はしない。

2)の『一本の樹のように老いて』を歌うプーディースはドイツがまだ東西に分かれていた頃から活動(活躍)する東ドイツ出身のバンドで、現在でも旧東独の人、あるいはその時代を懐かしむ人々に人気がある。次の4行が歌のメッセージである。

Alt wie ein Baum möchte ich werden,	私は一本の樹のように老いていきたい、
mit Wurzeln, die nie ein Sturm bezwingt.	嵐にも絶対倒されない根をもつ樹のように。
Alt wie ein Baum, der alle Jahre so weit,	毎年、毎年涼やかな木陰を広く、広く、広く
weit, weit, weit kühlende Schatten bringt.	与えてくれる樹のように老いていきたい。

4)、6)、7)、8)、10)の5曲は「シュラーガー (Schlager)」というジャンルに分類されるもので、いかにもドイツ風の歌謡曲と言えるものである。⁴この5曲についてはそれぞれ簡単に触れることにする。4)ニコルの『少しだけ平和を』は1982年のユーロヴィジョン・ソング・コンテストでグランプリを獲得した往年のヒット曲である。作詞はベルント・マイヌンガー (Bernd Meinunger)、作曲はラルフ・ズィーゲル (Ralph Siegel) によるもので、ニコルは当時まだ17歳だった。ヨーロッパ各国の代表が18人集まったのグランプリ獲得は、ドイツ語の歌としてはウド・ユルゲンス以来、2人目の快挙だったという。

Ein bisschen Frieden, ein bisschen Sonne	少しだけ平和を、少しだけ太陽を
Für diese Erde, auf der wir wohnen	私たちの住むこの地球のために
Ein bisschen Frieden, ein bisschen Freude	少しの平和、少しの喜び、

3 ネーナ及びこの曲については以下を参照されたい。

拙著『ドイツ・ロックの世界』(春風社、2006年)16～18ページ。

4 シュラーガーについても上掲書(注3)を参照のこと。18～21ページ。

Ein bisschen Wärme, das wünsch ich mir	少しの温もり、それを私は願っている
Ein bisschen Frieden, ein bisschen Träumen	少しだけ平和を、少しだけ夢を、
Und dass die Menschen nicht so oft weinen	そして人々がこんなに泣くことのないように
Ein bisschen Frieden, ein bisschen Liebe	少しの平和、少しの愛、
Dass ich die Hoffnung nie mehr verlier	それはもう二度と希望を失わないため

「サビ」の部分に上のような歌詞をもつこの歌は、当時の平和運動の気風にマッチして広く受け入れられ、〈A Little Peace〉として英語バージョンも作られ歌われたという。そのためドイツばかりでなく、イギリス、スウェーデン、オーストリア、スイスなどのヒットパレードでも1位になったものである。

6) はそのウド・ユルゲンス⁵の歌であり、異国の場末の居酒屋で居合わせた人たちと杯を傾けながら故郷を懐かしむという内容。聞かせどころの歌詞はこんな感じだ。

Griechischer Wein ist so wie das Blut der Erde.	ギリシャのワイン、それは 大地の血のようだ。
Komm', schenk dir ein und wenn ich dann traurig werde, liegt es daran, dass ich immer träume von daheim; Du musst verzeih'n.	さあ、もう一杯注ごう もしそれで悲しくなったら、 それはまだ私が故郷を 夢見ているからだ。 それはぜひ許してほしい。
Griechischer Wein, und die altvertrauten Lieder. Schenk' noch mal ein! Denn ich fühl' die Sehnsucht wieder; in dieser Stadt werd' ich immer nur ein Fremder sein, und allein.	ギリシャのワイン、 そして昔聞きなれた歌。 もう一杯注いでくれ！ なぜってまた郷愁を感じるからさ。 この町で私はいつも ただのよそ者にすぎず、独りぼっちってこと。

7) のウーテ・フロイデンベルクは当時の東独ヴァイマルで1956年に生まれた人。東西に分裂していた時代に西のハンブルク、デュッセルドルフに移り住み、東独を捨てたが、統一後の1996年には再びヴァイマルに戻り、東ドイツの歌手として活躍している。8) もまた1946年生まれのカラフィ・ドイッチャーが歌ったもので、1965年の大ヒット曲である。こ

5 上掲書(注3)を参照のこと。12～16ページ。

の歌は現在ではもう永遠のエバーグリーンという扱いである。そして10)の曲名の日本語訳は『狂気の沙汰』としたが、これは独和辞典を調べると「狂気、常軌を逸した行為」などとなっていることからそうしたのだが、何かしっくりこない。歌の内容からは、愛する「君」が他の男のところへ行ってしまったという「気も狂わんばかり」の状況を示していることがわかる。この歌はしかし、通常なら深刻なそうした事態を茶化してしまい、面白おかしく料理してしまう。リズムも軽快で、メロディーも長調で楽しいことを歌っているような響きだ。これを歌うヴォルフガング・ペトリもドイツの歌謡界で知らぬ者のない極めて有名なミュージシャンである。彼のデビューアルバムは1976年に出た。1951年の生まれであるから25歳の時ということになる。それから30年間、常に第一線で活躍し、売り上げたシングル、アルバムの総数は1000万枚に達するという。しかし、2006年に突然の引退宣言をしてファンを驚かせた。というわけで、現在は音楽活動はしていないが、彼の歌の多くは今でもパーティなどで愛唱され、世代を超えて支持されている。⁶

さて、もう一つ9)の『雲の上で』が残っている。これは「シュラーガー」ではなく、「リーダーマッハー (Liedermacher)」というジャンルに分類される。「リーダーマッハー」は日本というなら「シンガー・ソングライター」のことなので、もともとはミュージシャンそのものを指すのであるが、これがドイツでは一つのジャンルの概念となっているのである。⁷

Über den Wolken	雲の上では
muss die Freiheit wohl grenzenlos sein	自由はおそらく限りないものにちがいない
alle Ängste, alle Sorgen, sagt man,	どんな不安も、どんな心配事もずっとそれに
blieben darunter verborgen und dann	覆い隠されているのだという、だとすれば、
würde was uns groß und wichtig erscheint,	大そうで重大に思えることも、いっぺんに
plötzlich nichtig und klein	ちっぽけで取るに足らないものになるだろう。

飛行機に乗って下界を眺めると、家も車も何もかもがおもちゃのように小さく見える。そしてもっと上昇すると、雲を突き抜けて、やがて雲と空以外は何も見えなくなってしまう。そうなると飛行機からは、私たちの通常の生活の場は目に見えなくなり、はるか下界に追いやられる。それと同じように、物事の見方をちょっと変えるだけで、常日頃とらわれている悩みや憂いは「ちっぽけで取るに足らないもの」に思えてくる。人生は自由で明るいものでなければならぬ。これがこの歌のメッセージといえようか。

ここまで「最も愛唱されていると思われるドイツ語の歌」について述べてきたが、アンケートで挙げられた曲はもちろんいうまでもなく本当に「最も愛唱されて」いるかどうかではなく、

6 ヴォルフガング・ペトリについては以下を参照した。

<http://www.poplexikon.com/bands/wolfgang-petry>

7 リーダーマッハーの詳細については、上掲書(注3)を参照のこと。54～59ページ。

回答者がただそう思ったものである。つまり、事実が問題なのではなく、そこに挙げられた曲(とミュージシャン)を検討することで、ドイツ人がどんな感覚をもっているのかを探りたかったのである。ここでは結局、普遍的なものというか、往年の大ヒット曲といえるようなものが大半であった。それ以外では「悟り」あるいは「人生の知恵」、「人生の洞察」を歌ったものがあった。

II. 慰めや勇気を与えてくれる歌

この章では質問項目4)の「あなたに慰めや勇気を与えてくれるドイツ語の歌は何ですか？」の中で回答の多かった歌およびミュージシャンをクローズアップしてみたい。ここで狙いとするのも、数値的な解析ではなく、挙げられた曲を個別に当たり、ドイツ人にとって「慰め」とか「勇気」を与えるものは何なのかを探ることである。アンケートでは自由記述として、挙げた理由を書いてもらっているが、これははっきり言ってそれほど参考になるものではなかった。どの曲に対しての理由かということは抜きにしていくつか例を挙げてみる。そうすれば言わんとすることを理解してもらえらるだろう。

- ・聞いていて楽しい、同時に勇気も与えてくれる。
- ・とにかくすてき。
- ・悲しい気分にならないようにしてくれる。
- ・親しみやすいメロディー、良いサウンド。
- ・歌詞の内容が慰めを与えてくれる。
- ・これで前の「彼氏」とうまくやっていけるようになった。
- ・私のワンちゃん(犬)が死んだとき、慰めになった。
- ・フランスでの夏の終わりを思い出させる。
- ・落ち込んだときに救いになる。
- ・歌詞が人生、愛、苦悩、戦い、喪失、そして希望を語りかける。

回答者にはお願いしておきながら、そんな言い草はないかもしれないが、以上のような具合で、要するに「なるほど」とうなずけるような理由にはなっていないと言わざるをえない。しかし、それら一つ一つの曲が彼らにとって「慰め」を与え「勇気」を奮い起こしてくれるものとして響いているがゆえに、回答として挙がってくるのだと思う。そのところこそ重要なのであって、彼らには慰め、勇気がどのような形で伝わるものなのかを歌詞や音楽を通じて探してみたいのである。

まず最初は前章にも出てきたウド・ユルゲンスである。彼の歌〈Ich war noch niemals in New York (私はまだ一度もニューヨークへ行ったことがない)〉という回答が多く見られた。どんな歌詞なのか調べてみると、特に慰めや勇気を与えてくれる歌のように思えない。こんな感じの歌なのだ。

Ich war noch niemals in New York,
ich war noch niemals auf Hawaii,
ging nie durch San Franzisko
in zerriss'nen Jeans,
Ich war noch niemals in New York,
ich war noch niemals richtig frei,
einmal verrückt sein
und aus allen Zwängen flieh'n.

私はまだ一度もニューヨークへ行ったことがない
私はまだ一度もハワイへ行ったことがない
サンフランシスコを一度だって闊歩したことがない
破れたジーンズをはいてね。
私はまだ一度もニューヨークへ行ったことがない
本当に自由だったことなんかまだ一度だってない
気が狂ったみたいになって
あらゆる束縛を逃れて自由になったことなんて。

都会に暮らすある夫婦がいて、夕食後、夫はタバコを買いに行くと言って出かける。その途中でまだ行ったことのないニューヨークやハワイに思いをはせる、というものだ。これでは何のことなのかわからないので、インターネットで⁸さらに調べてみると、なんとこれはウド・ユルゲンスの22曲の歌で構成されたミュージカルであることがわかった。その中に同名の歌もあるし、先に取り上げた『ギリシャのワイン』もある。さらに回答の中にあちこちでちらほらと見かけた〈Mit 66 Jahren (66歳で)〉もある。この歌は66歳になり、年金生活に入る「私」が、その日から身だしなみなどかまわず、わざとだらしない髪型にしてみたり、革のスーツに身を包んで買ったバイクを吹っ飛ばしたり、公園で野外コンサートを催してエレキギターを大音量で鳴らしたり、すでに「おばあちゃん」である連れ合いとロックを踊りにディスコへ出かけたりと、通常の年寄りではやらないようなことをやりたいんだと意思表示する。ちょっとおどけたような内容の歌詞と相まって、音楽のほうもリズムカルで、一緒に飛び跳ねてしまいそうな楽しいものである。その音楽に乗って、サビの部分では次のように歌い上げられる。

Mit 66 Jahren , da fängt das Leben an

66歳、それで人生は始まる

Mit 66 Jahren , da hat man Spaß daran

66歳、それを楽しむんだ

Mit 66 Jahren , da kommt man erst in Schuss

66歳、それでやっと活気にあふれるんだ

Mit 66 Jahren , ist noch lang noch nicht Schluss

66歳ではまだ長いこと終わりになんかないよ

この歌詞を見ればすぐに分かると思うが、この曲は当然、ある程度年齢のいった人たちに支持されている。しかし、興味深いのはウド・ユルゲンスがこの歌を43歳の年に作っていることだ。これは何やらビートルズの〈When I'm Sixty-Four (64歳になったら)〉を思い起こさせる。ビートルズはこの曲をおそらくは20代のときに作っているのではないだろうか。64歳という

8 http://de.wikipedia.org/wiki/Ich_war_noch_niemals_in_New_York

老年になっても「君」と「僕」は今と同じように愛し合っていたらいいという内容だったと思うので、ウド・ユルゲンスの歌とは少々異なりはするが、若いときに自分の老後を想像するという形は同じである。

ユルゲンスは1934年の生まれなので、今はすでに74歳ということになる。歌のタイトルの66歳はとっくに過ぎているが、半世紀以上に渡り歌を作り続け、自ら歌ってきた人で、テレビ出演やコンサート活動も続けている。私事ながら、一度ユルゲンスのコンサートをドイツのニュルンベルクで実際に見たことがあるが、そのステージ・パフォーマンスは楽しく、そして素晴らしいものである。自分の歌を聞きに集まった聴衆を絶対にあきさせないという気持ちが伝わってくるコンサートなのだ。

話を戻すが、この『私はまだ一度も…』のミュージカルの初演は2007年のハンブルクでのことであるから、まだ最近だ。すでに述べたように、これが彼の新旧の22曲で構成されているのだから、彼の音楽活動の、とりあえず現在のところまでの集大成といえるような位置づけとなるものだろう。

次に取り上げるのは、ウド・ユルゲンスとは対照的で、まだ10年ほどの活動で、現在ブームの真っ只中というミュージシャン Xavier Naidoo の〈Dieser Weg (この道)〉である。第1章で名前だけ挙げておいたものである。彼は現在ドイツでもっとも人気があり、話題性のあるアーティストの一人である。⁹ もともとのドイツ人ではないので名前もどう読むのかわからなかったが、ドイツ人に聞いたところ〔クセイヴィア・ナイドゥー〕くらいがカナ表記ではどうやら最も近いらしい。音楽の傾向としてはソウルやR&B(リズム・アンド・ブルース)、ジャズ、それにヒップ・ホップをミックスしたような感じだ。歌詞の内容はもちろんさまざまなのであるが、キリスト教的な隣人愛や外国人憎悪の撲滅を訴えるようなものが目を引く。これは彼が黒人であることから、幼少年時代にあざけられたり、脅されたりした経験が強く影響しているようである。

クセイヴィア・ナイドゥーの父はスリランカの出身で、ドイツ人とタミルあるいはインド人の先祖をもち、母もエジプト出身の南アフリカ人だが、家族はドイツにやって来てマンハイムに居を定めることになった。彼はそこで1971年10月2日に生まれた。家庭ではローマ・カトリック教のしつけで厳しく育てられたが、その幼少年期は差別的扱いで困難の多いものだったらしく、危険を避けるためにキックボクシングを習ったりもしている。黒い肌をもつことからくる屈折した感覚を彼はこの頃からずっと持ち続け、今でも自分のことをしばしば「クアプファルツの黒人」とか「シオンの息子」などと呼んでいる。ちなみに前者は『クアプファルツの狩人』というドイツでは良く知られた民謡をもじったものだという。

そして、日本なら中学卒業程度の時期ということになるろうか、「中等教育修了資格 (Mittlere

9 クセイヴィア・ナイドゥーについては以下を参照した。

<http://www.xavier.de/de/index2.html>

http://de.wikipedia.org/wiki/Xavier_Naidoo

Reife)」を取得すると、働く道を選ぶが、定職にはなかなかありつけずコックの修業、水着のモデル、ドアマンなどの職を転々とした後、アメリカに飛んでいる。ここでは「コブラ」という芸名で、1993年〈Seeing is Believing〉という英語タイトルの初めてのソロアルバムを出している。彼は少年時代に学校や教会の合唱団で歌っていたが、職業と結びついた形での音楽活動といえるのは、このアメリカでの経験が初めてのものといえるだろう。しかし、彼の成功はここからまだ5年を待たねばならない。

1998年5月30日発売の彼の2枚目のアルバム〈Nicht von dieser Welt（この世界ではなく）〉は100万枚以上を売り上げ、それに伴って行われたライブ・ツアーも30万人以上の観衆を集めることになった。これによりクセイヴィア・ナイドゥーの名前はドイツ全土、さらには同じドイツ語圏のオーストリア、スイスに広く知れ渡ることになる。アルバムはそれぞれのヒットチャートで第1位を占める。

ここからのナイドゥーの活躍はいちいちが目を引くものであり、ソロ活動と並行して10数人のミュージシャン集団である〈Söhne Mannheims（マンハイムの息子たち）〉の中心的存在としても活躍している。このグループは、文字通り彼の生活拠点であるマンハイムでのポップ音楽のシンボルとなっている。そのファースト・アルバムは〈Zion（シオン）〉であり、宗教的性格を隠さない。また、次のアルバムは「Zion」をちょうど逆に読むというのか、ひっくり返すというのか〈Noiz〉という。これは英語的に「ノイズ（noise）」と読ませようとしているのではないかと思う。

このように、ソロとグループとしての活動は現在まさにきわめて順調というところであるが、そんな勢いの中で2005年12月に発売されたアルバム〈Telegramm für X（X宛の電報）〉もドイツ、オーストリア、スイスのヒットチャートでたちまち第1位となり、何週間もトップテンにとどまった作品である。その中に『この道』がある。この歌は人生を一つの道にたとえて、その道に行く自分「私」が同じ道に行く者「君」に対して語りかける形になっている。第2節の歌詞は次のようなものである。

Dieser Weg wird kein leichter sein	この道は決して容易なものではないだろう
Dieser Weg wird steinig und schwer	この道は石ころだらけの困難なものになる
Nicht mit vielem wirst du dir einig sein	君は多くの者と軌を一にすることはないだろう
Doch dieses Leben bietet so viel mehr	でもこの人生ははるかに多くを与えてくれるのだ

この4行は歌の中で何度も（5、6回）繰り返されており、聞く者は耳もとで呪文をささやかれているような気分になってくる。曲のタイトルと合わせて考えるまでもなく、間違いなくこの歌の主要なメッセージの一つである。決して容易ではない人生だが、ずっと歩いていけばそれ以上のものを与えてくれるはずだと聞く者を励ましているのだ。そして、もう一つのメッセージとして次のようなフレーズがある。

Manche treten dich	君を足蹴にする者もいる
Manche lieben dich	君を愛する者もいる
Manche geben sich für dich auf	君のために身を捨てる者だっている
Manche segnen dich	君を祝福してくれる者だっているんだ
Setz dein Segel nicht	風が海を荒らすとき
wenn der Wind das Meer aufbraust	帆を上げたりなんかするな

ここでは「君」に対する人々の接し方はさまざまであり、敵意をもつものもいるだろうが、あらかたは好意的なものであることを告げている。しかし、「君」の立場になって考えると、私たちは日常、そうした人々の視線を感じることなく、人々の気持ちを理解することなく、むしろ不安な精神状態で日々を過ごしているのではないかと考えさせられる。最後の2行は人生を今度は帆船で行く航海にたとえており、帆船は風があつて初めて前に進むことができるのだが、逆にその風があまりに強いものである場合は、あわてずに周りの状況を見た方がいいと注意を促している。この辺は、黒人ということで幼いころから辛酸をなめたナイドゥーの人生訓とも取れるところである。この作品には、クセイヴィア・ナイドゥーというミュージシャン、あるいは彼の率いる音楽集団ゼーネ・マンハイムス (Söhne Mannheims) が決して一過性の現象には終わらないと思わせる何かが隠されているように思う。

3番目に紹介したいのは、クセイヴィア・ナイドゥーよりもっと若い世代のミュージシャン〈Silbermond (ズィルバーモント)〉の〈Das Beste (ベスト)〉という曲である。これはウド・ユルゲンスのものが高年齢層に対する励ましの歌であったのと対照的で、青少年、それも愛し合う者たちに、その喜びを伝えるような内容である。

Ich habe einen Schatz gefunden	宝ものを一つ見つけたの
und er trägt deinen Namen	そしてそれはあなたの名前がついてるの
So wunderschön und wertvoll	とてもすてきで、価値のあるものなの
mit keinem Geld der Welt zu bezahlen	世界中のお金を集めても支払いきれないほど。
Du schläfst neben mir ein	あなたが私のとなりで眠りにつく
Ich könnt dich die ganze Nacht betrachten	一晩中、あなたのこと見つめてられる
Sehn wie du schläfst, hören wie du atmest	あなたの寝ている様子を見て、寝息を聞ける
bis wir am Morgen erwachen	朝、私たちが目覚めるまでずっと。

歌はこんな感じで始まる。ヨーロッパの言語では発言内容が男なのか女なのか判別のつかないことが多く、ここでは一応、女性の言葉として訳してみた。それはこの4人組のバンドのメインボーカルをシュテファニー・クロース (Stefanie Kloß) という女性が担当しているからと

いう単純な理由によるものだが、いずれにせよ若い男女のラブソングであることはすぐにわかるものである。それにしても、愛の喜びがこれほど直接的に、単刀直入に語られることから、ドイツ、あるいはヨーロッパの人々のもつ、日本人とは異なる感覚が見て取れないだろうか。日本語の歌にももちろんそういった内容のものも皆無ではないが、それほど多いものではないだろうし、また、仮にそのようなものがたまにあったとしても欧米の歌に触発されて、というかヒントにして作られたというケースがほとんどなのではないかと思う。

そして、この歌のクライマックスの部分の歌詞は次のようなものである。

Du bist das Beste, was mir je passiert ist	あなたは私のこれまでの人生でベストな存在
Es tut so gut wie du mich liebst	それはあなたが私を愛してくれるから
Vergess den Rest der Welt	私はそれ以外の世界は忘れてしまう
wenn du bei mir bist	あなたが私のところにいてくれるとね。
Du bist das Beste, was mir je passiert ist	あなたは私のこれまでの人生で最高のもの
Es tut so gut wie du mich liebst	それはあなたが私を愛してくれるから
Ich sag's dir viel zu selten	こんなこと言うことはめったにないけど
es ist schön, dass es dich gibt	あなたが存在していること、それは素敵なこと。

「ズィルバーモント」は「銀色の月」と訳せるが、これをなぜバンド名にしたのかはまだ突き止めていない。ただ、このバンドは1998年頃から活動を開始するが、初めは「JAST」と名乗っていた。これは先ほど述べたボーカルがStefanieという女性、他にヨハンネス (Johannes)、アンドレアス (Andreas)、トーマス (Thomas) という男性が3人で、それぞれの頭文字を続けたものであった。当時は自作、カバー曲を問わず、ほとんどが英語の歌だったが、2001年ごろから次第にドイツ語の歌を歌うようになっていった。そして、2004年にデビューアルバム〈Verschwende deine Zeit (あなたの時を浪費せよ)〉を出したが、これが大ヒット。シングルでもヒットした〈Symphonie (シンフォニー)〉を含むこのアルバムによって、ドイツ語で歌うミュージシャンとして押しも押されぬ地位を築き上げたのである。¹⁰

さて、この章ではあと二つの曲、そしてそれを歌うミュージシャンについて述べていきたい。一つ目は〈Die Toten Hosen (ディー・トーテン・ホーゼン)〉の〈Steh auf (立ち上がれ)〉である。ディー・トーテン・ホーゼンについてはすでに拙著で詳しく述べたことがある¹¹ので重複を避けるが、一つだけ断っておきたいのは、このバンドはウド・ユルゲンスとはまた違った意味で、長いこと、特に若い世代に支持されてきたグループであるということである。ジャンルの的には

10 ズィルバーモントについては以下を参照した。

<http://www.silbermond.de/www/html/main.html>

<http://www.poplexikon.com/bands/silbermond>

11 上掲書(注3)を参照のこと。115～146ページ。

ユルゲンスがシューラーガー（歌謡曲）であるのに対して、こちらはロック、パンクロックである。次章で取り上げる〈Die Ärzte（ディー・エールツテ）〉と何かにつけて比較されるが、互いにドイツ・パンクの第一人者を自認しつつ20年以上に渡って競い合っている。彼らもすでに40歳を過ぎ、決して若いとはいえない。そして、彼らとともに若かったファンも同じように年を取る。しかし、この2つのグループはその後からくる新たな若い世代をも惹きつける魅力を持っている。日本でいうならサザン・オール・スターズのような怪物バンドなのである。

ディー・トーテン・ホーゼンの『立ち上がれ』は、2002年に発売された彼らのアルバム〈Auswärtsspiel（遠征試合）〉に収められている曲である。このアルバムは全18曲から成るが、アルバム同名の曲は4番目、『立ち上がれ』は13番目に置かれている。まず、歌いだしはこんな感じである。

Wenn du mit dir am Ende bist und du einfach nicht weiter willst, weil du dich nur noch fragst warum und wozu und was dein Leben noch bringen soll	自分はもう終わりだと思い、これ以上先へ 進みたくなくなることがあるだろう。 それは自分の人生がこの先 なぜ、何のために、そして何を もたらしてくれるのかと考え込むからだ。
---	---

Halt durch, auch wenn du allein bist! Halt durch, schmeiß jetzt nicht alles hin! Halt durch, und irgendwann wirst du verstehen, dass es jedem einmal so geht.	がんばれ、たとえ孤立してしまっても！ 耐え抜け、すべてを投げ捨てないで！ 戦い抜け、そうすればいつか 君にもわかるだろう、 だれでもいつかは何とかかなるんだと。
---	--

この歌は個人的にも好きなものの一つなので、全てを紹介したいところである。しかし、そうすると紙面を大幅に割いてしまうことになるので断念することにする。とにかく歌の内容は初めから終わりまで上に挙げたような励ましであり、くじけそうになっている人に対する応援歌になっている。音楽もそれに見事にマッチしていて、「ホーゼン節」とか「ホーゼン・サウンド」とでもいうような、ディー・トーテン・ホーゼンの面目躍如といった感じの曲に仕上がっている。そして、次のようなリフレインが来る。

Steh auf, wenn du am Boden bist! Steh auf, auch wenn du unten liegst! Steh auf, es wird schon irgendwie weitergehn!	へたばっている時こそ、立ち上がれ！ たとえ最悪な状態だとしても、立ち上がれ！ 立ち上がるんだ、そうすりゃ何とかなっていく！
---	---

リフレイン部分は多くの場合、その歌の聞かせどころであり、核となるメッセージであるが、

この歌も例外ではない。このような歌が支持されるということは、ドイツも日本と同様に、その日常はストレスの多いもので、もう何もかも嫌になってしまうという気持ちになりやすい社会構造をもつと推測される。

最後のもう一つは〈Herbert Grönemeyer (ヘルベルト・グレーネマイアー)〉の〈Der Weg (道)〉である。グレーネマイアーについては、ドイツ芸能界の超大物であるにもかかわらず、これまでまとまった説明をしたことがなかったので、ここではまずこのミュージシャンについて少々詳しく述べてみたい。¹²

グレーネマイアーは1956年4月12日、ゲッティンゲンに生まれた。ゲッティンゲンはニーダーザクセン州の州都であり、統一した現在のドイツではほぼ中央に位置する町である。彼は初めから音楽を志していたわけではなく、演劇に興味をもっていた。大学では音楽と法律を専攻したが、彼が公に名を知られるようになったのは1981年の映画〈Das Boot (邦題『Uボート』)〉への出演である。つまり、彼は映画俳優として登場したのだ。しかし、その後次第に音楽活動に力を入れるようになり、1984年に出たアルバム〈4630 Bochum (4630 ポーフム)〉が大ヒットして、同時にコンサート活動も精力的に行うことによりミュージシャンとしての人気を決定的なものにした。その後、何枚ものアルバムを出しているが、その作品の中で政治批判的な姿勢も明らかにしている。貧困などの社会問題にも取り組んでいる。

プライベートでは、1993年に結婚し、一男一女をもうけている。しかし、幸せな結婚生活は長くは続かず、わずか5年後の1998年に妻のアンナを癌で亡くしている。おまけにそのちょっと前にも兄のヴィルヘルムが癌で亡くなっている。つらい1年だったと思うが、おそらくそれがきっかけで芸能生活から身を引いてしまう。心の整理に時間がかかったのだろう、カムバックは2002年のことである。それから現在までは再び活発な動きを見せているようである。すでにそれ以前からのことであるが数多くの賞を受賞しているばかりでなく、2006年、サッカーのドイツ・ワールドカップではオープニングのサプライズとして登場した。結局、グレーネマイアーについてもこれまでの数人と同じような表現になってしまうが、彼もまたそれに輪をかけて老若男女に広く知られる存在である。ドイツの誇る国民的大スターの一人なのである。

彼のたまかな経歴は以上の通りである。次に歌の『道』であるが、これは上に述べた奥さんの死がきっかけとなって作られたものであり、愛する妻を思い切々と歌われる名曲である。これまた相当長い歌詞なので全部を載せることはしないが、それでも少し順を追って見ていくことにする。

Ich kann nicht mehr sehen
trau nicht mehr meinen Augen
Kann kaum noch glauben

僕にはもう見るができない
自分の目をもう信用することができない。
信じるということがもうほとんどできないでいる

12 グレーネマイアーについては以下を参照した。
<http://www.poplexikon.com/bands/herbert-groenemeyer>

Gefühle haben sich gedreht
Ich bin viel zu träge
um aufzugeben.
Es wäre auch zu früh
weil immer was geht

いろんな感情（おもい）がぐるぐる回っている。
僕はあまりに怠惰（ぐず）すぎて
諦めることができない。
それはまた早すぎることなのかもしれない、
なにしろいつも何かが起こっているんだから。

2002年発売の〈Mensch（人間）〉というアルバムに収められた『道』はこんな感じで始まる。ここでは、奥さんを癌で失った後、その悲しみは苦しみに変わり、それまでに二人で築き上げてきた生活スタイルは一挙に崩れ去ってしまった。おそらく生きていくことの意味もわからなくなってしまうのであろう。あらゆることに遅疑逡巡している様子が見て取れる。そして、亡くなった妻を「君」として呼びかける。

Du hast jeden Raum
mit Sonne geflutet
hast jeden Verdruss
ins Gegenteil verkehrt
nordisch nobel
deine sanftmütige Güte
dein unbändiger Stolz
das Leben ist nicht fair

君はどんな空間も
陽の光で満たしてくれた。
君はどんな嫌なことがあっても
それをいつも反対の方向に持って行ってくれた。
北の人間は気品にあふれている。
君のもの柔らかな気立ての良さ、
君のとらわれのないプライド。
人生ってフェアじゃない。

「僕」にとって「君」の存在は太陽であり、「僕」にとっての慰めであった。現在の絶望的状態は、そんな奥さんであったがゆえに余計増幅されるのである。5行目の〈nordisch nobel〉はしばらくの間理解することのできない言葉であった。理解できないから訳すこともできなかった。ここでは結局「北の人間は気品にあふれている」と訳したが、それはおそらく奥さんが北の出身であったのだろうとの想像からである。それはともかく、そんなすばらしい人間が突然亡くなってしまうことから「人生ってフェアじゃない」という認識が出てくることになる。これまた余談になってしまうが、最近のドイツ・ポップスの歌詞には「フェアでない人生」という文句がしばしば見られるが、それはおそらくこの歌の影響ではないかと考えている。

Dein sicherer Gang
deine wahren Gedichte
Deine heitere Würde
dein unerschütterliches Geschick
Du hast der Fügung

君の確固たる足取り、
君の真実の詩（ことば）。
君の朗らかな気品、
君の何ごとにも動じない手際のよさ
君は神の定めた運命に

deine Stirn geboten
hast ihn nie verraten
deinen Plan vom Glück
deinen Plan vom Glück

勇敢にも立ち向かった。
君は決して投げ出さなかったよね、
幸福になろうという君の抱いていた考えを、
幸福になろうという君の抱いていた考え。

生きていた頃の妻を回顧すると、上の9行のようなほとんど非の打ち所のない人間として「君」の存在が浮かび上がる。大切な人を失うと、その人のいい所ばかりが思い出されるものだ、とってしまえばそれまでだが、ここには何かそれ以上の思い入れが感じられる。それは、原詩のドイツ語がもつリズムないしはメロディーによると同時に、「君の」を意味する〈dein〉、〈deine〉、〈deinen〉あるいは「君は」を表す〈du〉が1行を除いて各行に置かれており、それが二人をむすぶ強いくさびのようにならずりと重く響くからである。

歌詞ではこんなふうにしばらくの間「君」を思い出しつつ悲嘆にくれた後、最後の節になってようやく意識が「僕」、つまり自分自身に戻ってくる。

Ich gehe nicht weg
hab meine Frist verlängert
neue Zeitreise auf eine Welt
habe dich sicher in meiner Seele
ich trag dich bei mir
bis der Vorhang fällt

僕は立ち去りなどしない
残りの猶予期限を延ばしたよ。
新たな世界への新たなタイムトラベルさ。
僕は君のことを確かに心の中に持ち続けている
君のこと、僕のもとで支え続けるよ、
この人生という芝居の幕が下りるまでね。

もはや存在しない「君」により絶望の淵に突き落とされた「僕」は、自分ももう生きていてもしょうがないと何度も己を問い詰めたことだろう。しかし、他ならぬその「君」を心にとどめつつ、なんとか立ち直ることのできたというのがこの節である。曲は、もう少しの間生きていってみようかという決意表明ともいえる形で、淡々と終える。

この曲の解説の初めで、長い歌詞なので全部は載せないといったが、これは実は口実で、正直いうと全部を訳しきっていないのである。うまく解釈できない部分がまだいくつかあるのだ。例えば〈(Wir) haben den Regen gebogen〉という1行があるが、これはそのまま訳すと「(私たちは) 雨を曲げた」となる。前後の意味の流れを見ても何のことやらわからない。日本語のできるドイツ人にも尋ねてみたが、彼もどう訳したらよいか、というよりどう解釈したらよいかわからない。彼の言うには、この歌詞はすでに文学的な意味での一つの詩であり、詩はその人によりさまざまな解釈の余地が残されるものだということだ。だから文字通り訳してみても意味がなく、場合によると並行して3つにも4つにも解釈できることがあるというわけだ。上の例でもその詩行の理解の解決にはならないのだが、「虹」のことをドイツ語では〈Regenbogen〉ということから、その辺のほのめかしがあるのかもしれないなどと今のところ考えている。

この曲には他にも〈Den Film getanzt in einem silbernen Raum〉とか〈von einem goldnen Balkon die Unendlichkeit bestaunt〉等の難解な言い回しがある。前者は「銀色の空間(部屋)で映画を踊った」、後者は「金色のバルコニーから無限を見つめて感嘆した」とそれぞれ直訳できる。しかし、「映画を踊る」とか「無限に感嘆する」とはいったいどういうことなのか、あるいは「銀色」や「金色」という色彩は何かを暗示するものなのかといった疑問は疑問のまま残っている状態である。

以上、『道』に関する説明ばかりかなり長いものになってしまったが、たとえポップスといえども、その歌詞には難解なものもあり、しかし、難解であるがゆえに逆にさまざまな解釈が許されるという面白みもあるのだということを繰り返してこの章を終えることにする。

III. その他の重要な歌及びミュージシャン～まとめに代えて

ここでは上の2章で取り上げたもの以外で、アンケートの回答に多かった歌とミュージシャンに眼を向けてみたい。第1、2章では、5つのアンケート項目のうちそれぞれ3)と4)の質問項目に従って述べてきたが、本章では残りの質問項目に従うことはせず、全体を眺めた上で、触れておいた方が良くと思われるものを選び、それにコメントを加えていくという形を取ることにする。

まず、第1章で名前だけ挙げたものだが、DJ・エッツィとニク・ペーの『君の名をもつ星』である。この曲を作ったのはニク・ペーの方で、それはすでに1999年のことだった。しかし、これが大ヒットすることになったのは2007年のDJ・エッツィとのコンビで吹き込んだバージョンだった。オーストリアのチャートでは13週間、ドイツでは11週間ナンバー1の座を守った。そして2007年の年間チャートでもトップだった。さらにこのバージョンがこの10年間で最も売れた歌の一つに選ばれた。ドイツ(語圏)の音楽賞として最も権威あるとされる「エヒー(Echo)」からも「今年のヒット曲」部門に選ばれている。

曲は特定のジャンルに分類するのが難しく、いわゆるポップス、そしてヒップホップ、シュラガー、ダンスミュージック等、いろいろな要素をあわせ持っているといえいいのだろうか。歌詞も単純明快で、わかりやすいラブソングである。その単純さゆえに人の心にダイレクトに響くのであろう。次の6行がリフレイン部分で、4回5回と繰り返されている。

Einen Stern der deinen Namen trägt	君の名を持つ一つの星
Hoch am Himmelszelt	天空高くに
Den schenk ich Dir heut' Nacht	それを今夜君に贈ろう
Einen Stern der deinen Namen trägt	君の名を持つ一つの星
Alle Zeiten überlebt	あらゆる時代を生きのびる星
Und über unsere Liebe wacht	そして僕らの愛を見守ってくれる星

DJ・エッツィもニク・ペーも共にオーストリアの人で、エッツィは1971年、ニクは1962年の生まれである。エッツィの本名はゲルハルト・フリードレ (Gerhard Friedle)、ニクはニコラウス・プレースニク (Nikolaus Presnik) という。ニクはニコラウスのニクなのかプレースニクのニクなのか、そしてプレースニクの頭文字、これでニク・ペーという芸名ができたのがすぐにわかる。しかし、DJ・エッツィという芸名はどうしてなのか今のところわからない。ひょっとすると彼の父親がDJとしてオーストリアで活躍していたことが関係しているのかもしれない。¹³

次は〈Ich + Ich (イッヒ・ウント・イッヒ)〉の〈Vom selben Stern (同じ星)〉である。「イッヒ・ウント・イッヒ」とは「私と私」という意味だが、アネッテ・フンペ (Annette Humpe) とアーデル・ターヴィル (Adel Tawil) の男女デュオである。アネッテ・フンペはすでに1980年代から活躍する伝説的ともいえるミュージシャンであり、プロデューサーでもある。ミュージシャンとしては80年代初頭のあの「ノイエ・ドイツェ・ヴェレ (Neue Deutsche Welle)」の時代、それはそれまで英語ばかりだったところに突如としてドイツ語の歌を歌うミュージシャンを輩出した時代であるが、その代表的なグループの一つ「イデアール (Ideal)」のメンバーであったとともに、その後も妹のインガと組んで「フンペ&フンペ (Humpe & Humpe)」というデュオ、その他いくつかのバンドで活躍している。また、プロデューサーとしてはプリンツェン (Die Prinzen) 等の新人発掘、リオ・ライザー (Rio Reiser) やウド・リンデンベルク (Udo Lindenberg)、ネーナとの共同プロジェクト等、古くから大きな仕事をする中で知られている。

アーデル・ターヴィルとは2002年にベルリンのとあるスタジオで知り合った。アネッテが歌詞を書いた曲をアーデルが歌うことになっていたが、アーデルの声に惹かれたアネッテの誘いでデュオの結成となったとのことである。ちなみにアネッテの妹のインガ・フンペもいまなお活躍中で、こちらはトミー・エッカルト (Tommi Eckart) とやはり男女デュオを組み〈2raumwohnung (ツヴァイ・ラウム・ヴォーヌング)〉として広く知られている。

『同じ星』は2007年6月に発売されたアルバムの題名であると同時に、同じ月にシングルとして出た歌のタイトルでもあった。アルバムはおよそ1年後、2008年の6月にドイツのアルバム・チャートの第1位になったとのこと、また歌のほうも彼らの大ヒット曲の一つになったものである。¹⁴

Steh auf, zieh dich an

起きて、服を着て

Jetzt sind andre Geister dran

今は昨日とは違った生気が漂っている

¹³ DJ・エッツィ、ニク・ペーについては以下を参照した。

<http://www.djoetzi-music.de/new/index.php>

<http://www.poplexikon.com/bands/nik-p>

¹⁴ イッヒ・ウント・イッヒについては以下を参照した。

http://de.wikipedia.org/wiki/Ich_%2B_Ich

Ich nehm' den Schmerz von dir,	僕が君の苦しみを取り除いてやる
ich nehm' den Schmerz von dir	僕が君の苦しみを取り除いてやるよ
Fenster auf, Musik ganz laut	窓を開けて、音楽を大きな音でかけて
Das letzte Eis ist aufgetaut	最後の氷はもう溶けた
Ich nehm' den Schmerz von dir,	僕が君の苦しみを取り除いてやる
ich nehm' den Schmerz von dir	僕が君の苦しみを取り除いてやるよ

最近のドイツ・ポップスの大きな傾向の一つといえようか、この曲も「君」に「僕」が語りかけるというスタイルを取っている。そして「僕が君の苦しみを取り除いてやる」という文句が上の引用以外でも、これでもかというくらいに繰り返される。そんな言い方をすると、何か否定的に響いてしまうかもしれないが、実際に曲を聞いていると、その繰り返しが説得力をもって心に染み込んでくる。クセイヴィア・ナイドゥーの『この道』もそうだったが、同じ文句がこれまでの常識を超える頻度で繰り返されるのも最近の傾向なのかもしれない。さらにこの曲の場合、もう一つ気になるのは、それが先の曲と同様タイトルに「星」をもっていることである。これは単なる偶然なのだろうか。

Wir alle sind aus Sternenstaub	僕たちはみんな星屑でできている
In unseren Augen warmer Glanz	僕たちの眼には暖かな輝きが残っている
Wir sind noch immer nicht zerbrochen,	僕たちは今なお壊れてなんかいない
wir sind ganz	僕たちは完全体なのだ
Du bist vom selben Stern	君は同じ星でできている
Ich kann deinen Herzschlag hör'n	僕には君の胸の鼓動が聞こえる
Du bist vom selben Stern	君は同じ星でできている
Wie ich (wie ich - wie ich)	僕と (僕と、僕と同じ)

以前は私たちの肉体は「土」でできているというのがキリスト教的認識として通用していたと思うが、ここでは夜空の星を眺めてなのか、その「星屑」でできていると歌われる。「君」も「僕」もだれもが「同じ星でできている」というのだ。これは現代社会が抱える孤立感の問題について歌っているように思われる。コンピューターや携帯電話に代表されるように、今日私たちの生活はさまざまな便利な道具により快適なものになっている。しかし、その一方で人と人、心と心のつながりがどんどん希薄なものになってしまう。互いの連帯感を確認しづらい時代になってしまっているのだ。そんな時代の中で「君」と「僕」は同じである、「僕たち」はみな同じであるというメッセージによって、ややもすると苛まれがちな不安の念を払拭しようとしているように響くのがこの歌である。

3 番目としてはディー・エールツテの〈Lass redn (言わせておけ)〉について述べておきた

い。この曲も複数の質問項目で挙げられているものである。エールツテは前章でも述べたようにディー・トーテン・ホーゼンと並び称されるドイツ・パンクのバンドとして圧倒的な人気を維持し、幅広い年代のファン層をもつビッグネームである。¹⁵

曲の『言わせておけ』は直前の歌とは正反対のような内容である。この歌でもさかんに「君」に対して語りかけるが、どうやらこの「君」は女性らしい。「丈の短いワンピースを身に着け」たり、「女性のひげ」などの言葉が投げかけられるからだ。そして、その「君」はどうも周りの人たちからあまり良い評判を立てられていない、そんな女性なのだ。

Jetzt wirst du natürlich mit Verachtung gestraft	今君はもちろん蔑んだような眼で見られている
Bist eine Schande für die ganze Nachbarschaft	君はご近所の方々の面汚しなんだ
Du weißt noch nicht einmal genau, wie sie heißen	君は彼らがなんと言う名前なのかすらまだ知らない
Während sie sich über dich	彼らといえば君のことを
schon ihre Mäuler zerreißen	さかんにこきおろしているというのに

「君」が品行方正な女性でなさそうなのは次の語句でも想像できる。

Du hast doch sicherlich ne Bank überfallen	君はきっと銀行強盗でもやらかしたんだろう
Wie könntest du sonst deine Miete bezahlen? Und	でなかったら家賃をどうやって払えるっていうの？
Du darfst nie mehr in die Vereinigten Staaten	君はもう二度と合衆国に行くことは許されないぞ
Denn du bist die Geliebte von Osama bin Laden	なぜって君はオサマ・ビン・ラディンの恋人だから

こんな感じで、エールツテの歌詞は一般的社会常識の範囲を抜け出して、むしろ過激な領域に足を踏み入れているといえる。パンクの生々しいばかりのエネルギーが躍動している。上に引用した部分だけからだと、エールツテは「君」として描かれた女性を批判的に見ているような感じがするだろう。しかし、エールツテは女性の側に立っているのだ。さんざんこき下ろすようなことを言っておきながら、彼らのメッセージは実は次の節に凝縮されている。分別くさい大人の言うことをいちいち真に受けていたら自分を見失ってしまう。自分はいくまで自分ら

15 エールツテについては上掲書（注3）を参照のこと。32～42ページ。

しく、自分を信じて生きていけというのだ。

Lass die Leute reden und hör ihnen nicht zu	言わせておけばいい、でもそれに耳を傾けるな
Die meisten Leute haben ja nichts Besseres zu tun	大抵の人はそれ以上良いことがないのだから
Lass die Leute reden, bei Tag und auch bei Nacht	言わせておけ、昼間も、それに夜の間だって
Lass die Leute reden	やつらには語るに任せておけばいい
-das haben die immer schon gemacht	— やつらはもうずっとそうしてきたんだから

さて、本論でまだ取り上げるべき人気の高い歌、ミュージシャンはたくさん残っている。それをミュージシャンに限っていくつか例を挙げてみれば、シュラーガーの〈Juliane Werding (ユリアーネ・ヴェルディング)〉や〈Andrea Berg (アンドレア・ベルク)〉。若い世代の〈Wir sind Helden (ヴィア・ズイント・ヘルデン)〉、〈Sportfreunde Stiller (シュポルトフロインデ・シュティラー)〉、さらには若いラッパーの〈Jan Delay (ヤン・ディレイ)〉と、ドイツ・ポップス界の大御所〈Udo Lindenberg (ウド・リンデンベルク)〉のコラボレーションなどである。しかし、ここまでで個々の紹介は終わりとしてほしい。以下では、これまで述べてきたことから感じたことや考えたことを総括的に述べることで、本論のまとめに代えたいと思う。

ドイツでも日本でも、ポップスやロックはサブカルチャーであり、それらをクラシックのような芸術と比べて数段低いものと見る傾向はいまだに残っているといえるだろう。しかし、これまで見てきたように、ポップスといえども良いものは良いのであり、その歌詞は単なる「ポップスの歌詞」を越えて、すでに「詩」といえるような領域に達しているものもある。その代表例は第2章の最後で取り上げたグレーネマイアーの『道』である。芸術は崇高なものであり、サブカルチャーは取るに足らぬものという固定観念はそろそろ見直すべきではなからうか。例を音楽のみに限って見れば、いわゆる「クラシック音楽」なるものも、もともとは当時の人々の嗜好に合わせて作られたのだ。ただその「嗜好」とはある時代、教会であるとか王侯貴族のような一部の権力者のものであった。それらの人々は自分たちのために作品を作らせることにより、自分たちを一般庶民から切り離し、他とは異なる特別な存在、優れた存在と自覚しようとしていた。悪く言うなら、それにより優越感に浸っていたのである。

それに対して、いわゆる「ポップス」は一般庶民のものであり、一般庶民の嗜好に合わせて作られたものであるといえる。そのルーツをたどっていけば「民謡」ということになるだろう。それはもちろん、ジャンルとしての民謡ではなく、本来の意味での、文字通りの意味での民謡、

つまり「民」衆のための歌「謡」である。もはやクラシック音楽の場合のような「一部の人」のものではない。全ての人を対象として作られた音楽なのである。この点がクラシック音楽とは異なるといえる。もっとも「ポップ」という言葉を辞典で調べると、「大衆向きであるさま。また、時代に合ってしゃれているさま」とある。だとすると、クラシック音楽は「大衆向き」ではないが、「時代に合」わせて作られているし、それぞれの作曲家がこれまで他の人がやっていない「しゃれ」た趣向を凝らして互いに競い合ってきたのだから、そのような意味ではクラシックもまた、それぞれの時代の「ポップス」だったといえることができるのかもしれない。

そんなふうには、本来のポップスは特定の権力者のものではないので、全ての人間に対して一様に向き合っているといえることができる。しかし、ポップスもまた時代の流れと共に、さまざまなジャンルに別れ、個々のジャンルは人の好みによって支持されたり、拒まれたりする。その細分化により、クラシックとはまた別の意味で差別化が図られることになるのである。つまり、人によりジャズが一番だったり、ロックが一番だったり、ブルースだ、ヒップホップだ、レゲエだ、はたまたカンツォーネだシャンソンだ、ドイツならシュラーガー、日本なら演歌が一番だといった具合に千差万別の状況を招くのだ。そこでは、それらをそれぞれに比べ、どちらが優れているかという問題ではなくなる。なぜなら、個々の評価はその人の嗜好、価値観によって定まることになるからだ。

詰まるところ、残るものは残るといえること、そしてやがて価値が認められていくことになるのだ。それはより詳しく言うなら、あるミュージシャンが活躍していた時代を、同じようにリアルタイムで生きていた世代がいなくなった後にどうなるかということである。ウド・ユルゲンスを例にしてみよう。ユルゲンスはすでに述べたように現在 74 歳であるが、今なお精力的な活動を続けている。しかし、失礼な言い方になるがそんな彼でもあと 20、30 年もすれば亡くなるだろう。それと同時に、彼の歌を、またコンサートを楽しんできたファンもいなくなる。その時、作品もまた同じように消えていくのかということである。それはもう少し時を待たねばならないが、消えてしまうのかもしれない。完全に忘れられた存在になってしまうのかもしれない。しかし、逆に次の世代、さらにまた次の世代へと聞き継がれていく可能性もあるのだ。さらにドイツから世界に目を向けてみよう。世界的に有名なミュージシャンはもちろん多数いるが、例えばエルビス・プレスリーが亡くなったのは 1977 年であるから、およそ 30 年前のことである。しかし、その存在をリアルタイムで知っている人間はまだ残っている。問題は、そうした人間がいなくなった時に、プレスリーの歌はまだ聞かれているかどうかということである。「ポップス」という言葉で括られる音楽はまだ歴史が浅く、これはポップスが初めて体験する事態なのである。ポップスはつまり、まもなく岐路を迎えることになるのである。ビートルズなども同様で、私たちが今クラシック音楽を見ているような感じで見られる時が必ず来るような気がする。それは 10 年後か 20 年後か、50 年後か 100 年後かわからないが、しかし、現在でもすでにその気配は感じられるのである。

(本学講師＝ドイツ語担当)

(注記)

本稿は（独）日本学術振興会「科学研究費補助金（萌芽研究）」（平成19－20年度）による研究課題「ポップス（音楽）から探る国民性～日独比較」（課題番号19652023）の研究成果の一部である。